

研修報告書 No.7

所 属： 国立国際医療研究センター

研修先： 田野病院

田野病院での地域医療研修は、私の当初の想像以上に自分にとって形成的な研修となった。高知の地域医療を見ることによって、日本全体の医療、さらには今後の医療が向かう先も見えたように感じる。その経緯を報告したいと思う。

正直にいうと高知県に来る前の私にとって、地域医療研修は特に思い入れのないものであり、何かを学びに行く心構えという訳ではなかった。高知を選んだ理由は、祖母が暮らししており、何度か幼少期に訪れたことがあるという程度のものであった。しかし、実際の田野病院での研修は日々学ぶことばかりで毎日が新鮮であった。

田野病院の地域医療研修の特徴は一言でいうなら地域医療の全てを俯瞰できる研修プログラムである。普段の東京の研修病院は特定機能病院で高度急性期医療機関であり、膨大な数の患者が東京圏全域から受診してくる。この現場で学ぶことも多いが、診ている患者さんの構成は医療の非常に特殊で偏った形でもある。患者の普段の暮らしぶりは想像もつかない。患者を紹介するクリニックの現場も見たことはない。ましてや退院していく先の後方支援病院の現状も知る由はない。転じて安芸医療圏は高知東部の広大な範囲を担い、県立あき総合病院と田野病院という二つの急性期医療機関、クリニック、老健、介護施設、訪問介護、リハビリ、地域社会の活動などが支えている。医療機関の数は10もないが、そのおかげで田野病院の研修では安芸医療圏の全ての医療現場で研修を積むことができた。普段の患者さんの高知での暮らし、地域の絆の強さ、クリニックの診療風景、さらには治療が終わってリハビリや社会復帰に励む姿などを存分に見ることができた。東京などの大都市圏も決して医療の構造が根本的に違う訳ではなく、あくまで安芸地域を何倍にも大きくしただけである。その意味で、地域医療研修を通じて医療のあらゆる側面を網羅的に学ぶことができたのは今後の医師人生の中で非常に大きな意味があると言える。

第二に、地域医療研修を通じて地域医療、引いては日本全体の課題と展望を垣間見ることができた。高知の地域社会における凄まじい高齢化は隠しようがない。田野町の人口およそ2,500人のうち15歳以下は240人に満たない。総人口も若年人口も毎年数パーセント減り続けており、20年後には今の人口の半分もないだろう。安芸医療圏の人口推測では今の45,000人から2040年には25,000人に減るといふ。実際、患者さんは80代や90代が当たり前であった。このような人口動態で希望はあるのだろうか？私はあると思う。高齢者と言っても、並大抵の高齢者ではない。快活聡明であり農作業で重労働をこなし、立派に地域社会に参加されている方が大多数であった。仮に高齢であっても、医療や介護の使用を必要最小限に抑え、長く社会の一員であり続けることによって今の高齢化でも地域社会の活力は

続いている。今後の少子高齢化の中でも安芸地域のように社会資源の密な連携と高齢者の自立自活を支援することによって地域社会を守ることができると私は感じた。

最後に、田野町で出会った皆様に感謝の気持ちを申し上げたい。特に田野病院の臼井理事長、臼井院長には心から感謝を申し上げたい。縁もゆかりもない私を暖かく地域に迎え入れてくださり、田野病院のありのままを余すところなく見せて頂いた経験は一生の宝物としたい。地域医療、そして高知県での素晴らしい思い出を胸に、今後の医師人生の中で高知の地域医療に恩返しする機会を探す次第である。